

【宗祖法然上人御法語】

(第十一) 深じん心しん

1

ただ心の善悪をも返り見ず、罪の軽かろき重おもきをも沙汰せず、心に「往生せん」と欲おもいて、口に南無阿弥陀仏と称えては、声につきて決けつじよう定じよう往生の思いをなすべし。

心の善い悪いなどということも省みなくてよいのです。罪が重いか軽いかを論ずる必要もないのです。往生したいと願ねがい、ただ南無阿弥陀仏と称えれば、ひと声ひと声ごとに必ず往生が叶かなう、という思いを発おこしなさい。

2

その決けつじよう定じよう心によりてすなわち往生の業ごうごうは定まるなり。

その心に揺るぎが無いならば、往生への道も確かなものとなっていくのです。

3

かく心得ねば、往生は不ふじよう定じようなり。

このように心得ないと、往生は不確かです。

4

往生は不定ふじようと思えばやがて不定ふじようなり。

往生など定まるはずもないと決めつけては、そのまま本当に定まらなくなってしまうのです。

5

一 定いちじようと思えば一 定いちじようする事にて候うなり。

定まると思えば定まるのです。

6

されば詮せんは、深く信ずる心と申し候そうろうは、「南無阿弥陀仏と申せば、その仏の誓いで、いかなる身をも嫌わず、一 定いちじよう迎え給うぞ」と深く頼みて、いかなるとがをも顧みず、疑う心の少しもなきを申し候そうろうなり。

結局、深く信ずる心というのは、「南無阿弥陀仏と称えれば、阿弥陀様のお誓い通りに、私たちにいかなる過あやまちがあろうともお嫌いになることなく、臨終には必ずお迎えくださるのだ」と、深くおすがりして少しも疑わないことをいうのです。